



**外題 石井常右衛門 高尾頼みの段**  
石井常右衛門政種は剣術に秀で、殿様の信頼も厚い。その常右衛門に剣術で負けた北村作左衛門らは、常右衛門に吉原で恥をかかせようと企む。それを事前に察した常右衛門は、吉原一の花魁である高尾太夫に馴染みのように振舞ってくれと頼む。花魁が舞台上に華を添える華麗な一幕。

## 第1幕

「芸能」という名の 地域文化

# 「でこ」芝居「眺楽座

ちようらく

ざい

「でこ、とーぎい」。  
幕が開き、中から太夫2人が現れ、音曲に乗せた語りが始まる。三味線と太夫、小さな人形の三者が織り成す、細やかな人情絵巻。原地区で、明治時代から伝わる説教源氏節を現在に伝える一座、「眺楽座」。そこには、地域の文化を次代に継承する姿があった。—特集 幕の向こうに— 7ページまで—

## 特集 幕の向こうに



「でこ」と呼ばれる人形  
現存する人形の頭は54種、胴体は40種。男、女、子ども、武士、町人など、それぞれの役柄にふさわしい作りになっている。衣装や装飾は極めて精巧で、風格ある佇まいを見せる。背丈は約1m、重さ約4kg。



語り太夫  
おかもとみさのぶ  
**岡本美咲文**(芸名)  
かがわ・ふみのぶ  
香川 文信さん  
(71歳・原)

続けられるのは、  
見てくれる人がいるから

父や祖父、曾祖父が一座に入っていたので、小さいころから親しみ、一座に入ることが家族の暗黙のルールだったと笑って話す香川さん。荷物運びから始め、30代で語りを任されたとのこと。当時の語り太夫の横について、体で覚えたという。あらずしを覚えることは当然だが、せりふ以外の人形の立場や背景を頭に入れ、声の抑揚で人形に心情を入れ込む。「観客を笑わせるのはそんなに難しくないが、泣かせるのは難しいですね」。先代の語りで、観客が泣く姿を多く見てきた香川さん。その先代に追いつこうと常に努力を怠らない。「続けられるのは、見てくれる人がいるからです」と話す。

語り太夫、三味線太夫  
舞台右にある語り座の紅白幕が開き、太夫2人が現れる。人形が主役の舞台の中で観客の目に入るのには語り太夫、三味線太夫の二人だけ。太夫は、創始者である岡本美根太夫の名前を継ぎ、岡本姓を名乗る。



三味線太夫  
おかもとみさのぶ  
**岡本美咲伸**(芸名)  
おりはしのぶき  
渡橋 伸樹さん  
(80歳・宮内)

お客さんの拍手が、  
何よりのご褒美です

もともと三味線が大好きで、長唄を勉強していたとき、この一座を知り加わったという渡橋さん。「三味線は、『調子3年』という言葉があるほど、1年や2年でできるものではありません。その師匠と向き合って、目と耳と体で覚えるもの。そのため、後継者の育成が一番重要なんです」と渡橋さん。この一座を続けていくためにも、他所で三味線を勉強した人にぜひ加わってほしいと話す。「好きでなければ続けていくことは難しいですね。三味線は奥が深く、ここまでやれば良いということはありません。舞台での責任は重いですが、お客さんの拍手が何よりのご褒美です」と話す。

「説教源氏節」は、天保の終わりのころ、江戸浄瑠璃・新内（浄瑠璃の一派）語りに、鐘をたたいて語っていた説教節を加味した音曲で、新内語りの師匠であった岡本美根太夫によつて始められた。大坂で一派を開いた岡本美根太夫は、基礎が固まった明治5年、「説教源氏節」と命名。名古屋で民衆芸能として大流行し、その後全国に広まる。

原に住み、音曲に巧みだった藤原イワは、明治16年ごろ、たまたま広島に二代目岡本美咲都司太夫がいることを知り、師事。修練を重ねたイワは、自ら岡本美咲意和と名乗り、同好の志を集めて活動を広げる。また、イワの夫の淳一郎は手先が器用で、浄瑠璃の操りをまねて自ら人形を製作。人形の所作を考案したり、舞台装置を作

### 廿日市市民俗芸能伝承館 (愛称 眺楽座)

廿日市市原1070番地1。平成18年7月22日落成。鉄骨造り平屋建て。観客収容人数120人。地域文化を後世に継承するために、「眺楽座」の稽古や公演に使用できる劇場として建設。

